

ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』の「序文」を読む

伊 佐 敷 隆 弘

概 要

ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』（『論考』と略記）の「序文」を丁寧に読むことによって、『論考』全体の構造と目的を明らかにする。その際、「『論考』全体をできるだけ整合的に読む」という方針を採る。『論考』は、「序文」と末尾の「§7 語り得ないことについては沈黙しなければならない」からなるフレームに囲まれ、「存在論（言語論の前提. §1と§2前半）→言語論（像理論と真理関数論. §2後半と§3と§4と§5）→哲学的諸問題の解決（言語論からの帰結. §6）」という構造を持つ。『論考』を貫くのは「語る」と「示す」の区別である。言語を可能ならしめるのは「論理形式」「世界と私と生の存在（世界＝私＝生）」である。これらは語り得ないが、言語のうちに示されている。示されるのは私に対してだから、言語にとって私の存在が必須である。『論考』というはしごを登り切った読者は神秘（世界・私・生の存在）に気づくことができる。適切な言語論によって哲学的諸問題を解決することと神秘に気づかせることが『論考』の目的である。ただし、『論考』自体が「語り得ないこと」を語ろうとするから、このはしごを登れるかどうかは、読者が何をするか次第である。

キーワード：ウィトゲンシュタイン、『論理哲学論考』、解明、語ると示す、神秘

はじめに

ウィトゲンシュタイン¹⁾の前期哲学の名著は『論理哲学論考 (*Tractatus Logico-Philosophicus*)²⁾』（『論考』と略記する）である。本論文では、『論考』の「序文 (Vorwort)」を丁寧に読むことを通して、『論考』がどのような構造と目的を持つ書物であるのかを明らかにしたい。

1) Ludwig Wittgenstein, 1889年生～1951年没。オーストリアのウィーン出身。ケンブリッジ大学（イギリス）のラッセルのもとで学ぶ。『論理哲学論考』完成後、30歳で哲学をやめ、オーストリアで小学校の教師となる。40歳で哲学に復帰し、のちにケンブリッジ大学教授となる。復帰後がウィトゲンシュタインの後期哲学である。

2) Wittgenstein (1922)。なお、哲学に復帰後（後期ウィトゲンシュタイン）の名著は、死後に出版された『哲学探究』（Wittgenstein (1953)）である。

「序文」は8つの段落からなるが、それらは4つのグループに分けることができる。本論文では次の4つの節で各グループを読んでいく。なお、第IV節が本論文の約半分を占める。

- I 解明としての哲学（【第1グループ】第①段落）
- II 語り得ることと語り得ないこと（【第2グループ】第②③④段落）
- III フレーゲやラッセルとの関係（【第3グループ】第⑤⑥段落）
- IV 沈黙の意味（【第4グループ】第⑦⑧段落）

筆者の『論考』解釈の基本方針は「『論考』全体をできるだけ整合的に読む」ということである³⁾。

I 解明としての哲学（【第1グループ】第①段落）

まず、第①段落全体を日本語に訳す。なお、日本語訳のあとにドイツ語原文を示す。

〔①〕「おそらく、本書は、ここで表現されている考えを——あるいは、それに似た考えを——かつて自ら考えたことがある人だけが理解できるだろう。それゆえ、本書は教科書ではない。この本を理解するひとりの読者を喜ばせたなら、本書の目的は達成されるだろう。(Dieses Buch wird vielleicht nur der verstehen, der die Gedanken, die darin ausgedrückt sind — oder doch ähnliche Gedanken — schon selbst einmal gedacht hat. — Es ist also kein Lehrbuch. — Sein Zweck wäre erreicht, wenn es Einem, der es mit Verständnis liest, Vergnügen bereitet.)」

ウィトゲンシュタインが『論考』を書き上げたのは29歳のときだった。この「本書で表現されている考えを自ら考えたことがある人だけが本書を理解できる」という言葉に「若きウィトゲンシュタインの気負い」が読み取れるかもしれない。しかし、潔癖なほど知的誠実さを追求する彼の気質（それは彼の伝記⁴⁾から知ることができる）を踏まえれば、彼の文章はできるだけ文字通りの意味で読んだ方がよい。

では、どう読むか。第①段落を理解するうえで有益なのは、彼が尊敬するフレーゲ⁵⁾の「解明(Erläuterung)」という考え方を参照することである。(彼のフレーゲへの敬意は「序文」第⑥段落にも表れている。)

フレーゲは記号論理学の創始者の一人だが、同時に、論理に関する哲学的考察もおこなった。フレーゲは論文「概念と対象」において、説明(Erklärung)と定義(Definition)を対比し、「概念(Begriff)」や「対象(Gegenstand)」のように「論理的に単純なもの(Logischeinfache)は定義できない。[…]

3) 同時に『論考』以外の資料（『草稿1914-1916』など）に過度に依拠せず、できるだけ『論考』内部に解釈の根拠を求めよう心がけた。

4) ウィトゲンシュタインの生涯については Monk (1990) と McGuinness (1988) という伝記がくわしい。

5) Gottlob Frege, 1848年生～1925年没。ドイツの数学者・論理学者。

示唆（Wink）を与えることができるだけだ」と言う⁶⁾。また、論文「思想」では「『真（wahr）』という語の内容は定義不可能だ」と言う⁷⁾。また、『算術の基本法則』第I部「概念記法の説明（Darlegung der Begriffsschrift）」1「原始記号（Urzeichen）」第1節 p. 6の脚注⁸⁾において、概念記法（すなわち論理式）と、概念記法を自然言語（日本語やドイツ語など）によって解明（Erläuterung）することとを明確に区別している。

要するに、「概念」「対象」「真理」などの「論理的に単純なもの」は（定義する際にそれら自身を使用せざるを得ないから循環が生じてしまい）定義することはできず、我々が自然言語に関して持っている言語感覚を当てにして何らかの示唆を与えることができるだけだ、とフレーゲは主張しているのである。たとえば、フレーゲによると、「明けの明星は惑星である」という（対象名「明けの明星」と概念語「惑星」からなる）命題が表しているのは、「明けの明星という対象が、惑星という概念に帰属している」ということであり、他方、「明けの明星は金星である」という命題において「明けの明星」も「金星」も（概念でなく）対象を意味しており、この命題は同一性を表している⁹⁾。そして、これらの命題を理解できる者であれば（かつ、そういう者だけが）「概念」と「対象」の違いを理解できる、とフレーゲは主張しているのである。

そして、ウィトゲンシュタインの『論考』にも「解明（Erläuterung）」という語が登場する。たとえば、§ 3.26 と § 3.263 において彼は次のように言う。

「§ 3.26 名（Name）が定義（Definition）によってさらに分解される、ということはない。名は原始記号（Urzeichen）である。」

「§ 3.263 原始記号の意味（Bedeutung）は解明（Erläuterung）によって説明（erklären）されうる。解明とは原始記号を含む命題（Satz）のことである。それゆえ原始記号の意味が既に知られて（bekannt）いる場合にのみ、解明は理解（verstehen）されうる。」

このように、原始記号の意味に関して定義と解明が対比されていることおよび先行する言語理解に解明の理解が依拠することという2点に関して、『論考』の「解明」はフレーゲの「解明」を引き継いでいる。

しかし、『論考』「序文」の第①段落を理解するうえで重要なのは、ウィトゲンシュタインが、フレーゲのように論理に限定せず、哲学そのものに関しても「解明」という語を用いているということである。

6) Frege (1892) p. 193 (邦訳 p. 50).

7) Frege (1918-1919) p. 60 (邦訳 p. 206).

8) Frege (1893) p. 6 (邦訳 p. 52の脚注2).

9) Frege (1892) p. 194 (邦訳 p. 51).

る¹⁰⁾。彼は § 4.112 において言う。

「§ 4.112 哲学の目的は考えの論理的明晰化 (Klärung) である。哲学は学説 (Lehre) ではなく活動 (Tätigkeit) である。哲学の仕事は本質的に解明 (Erläuterung) からなる。[…]

つまり、彼はここで、「読者が既に知っていること (しかし、明晰化できていないこと) を明晰にする活動が哲学だ」と言っているのである。だから、哲学は、読者が知らないことを教える学説ではない。それゆえ、第①段落で「本書は教科書ではない」と言われ、「同じことを考えた人だけが理解できる」と言われているのである。そして、知ってはいるが曖昧だったことが解明によって明晰になるなら、それは「読者を喜ばす」ことになる。

しかし、問題は、哲学において (ということは、『論考』において) 何が解明されるのか、ということである。『論考』の最後から2つめのパラグラフである § 6.54 において、ウィトゲンシュタインは『論考』を「はしご」に喩えている。このパラグラフにも「解明」という語が登場する。

「§ 6.54 私を理解する人は、私の諸命題を通して——それらの上に立ち——それらの先へ乗り越えたとき、ついにそれらが無意味であることを認識する。そうすることによって私の諸命題は解明をおこなう (erläutern)。 (いわば、彼ははしごを登り切ったあと、はしごを投げ捨てねばならない。) 彼は私の諸命題を克服しなければならない。そのとき彼は世界を正しく見る。」

解明によって、すなわち『論考』によって、達成されるのは、「世界を正しく見る」ことだ、と § 6.54 で言われているのである。「世界を正しく見る」とはどういうことなのか。『論考』とはどんな「はしご」なのか。これらの点に関しては、「序文」最後の第⑧段落を読む際に (本論文第IV節「沈黙の意味」で) 論じる。

II 語り得ることと語り得ないこと (【第2グループ】第②③④段落)

1. 『論考』の構造

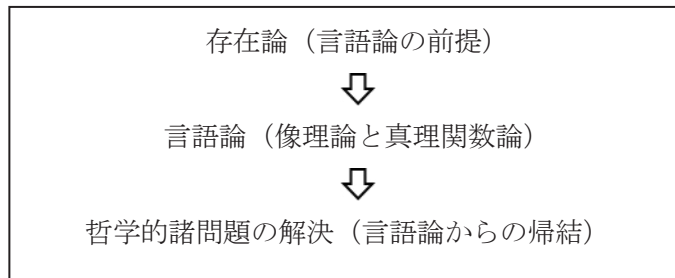
「序文」の第2グループに進もう。まず、第②段落の前半を訳す。

¹⁰⁾ 『論考』の完成した原稿を送られたフレーゲはウィトゲンシュタイン宛の書簡の中で、「序文」冒頭の第①段落に関して、「〔それでは〕この本は学問的業績というよりむしろ文芸的な業績になってしまう」と批判している。(「1919年9月16日付け書簡」フレーゲ (2002) p. 293.) フレーゲは『論考』の最初の数ページしか読まなかったようだ。

〔②前半〕「本書は哲学的な諸問題を扱う。そして、それら諸問題が提起されたのは——私の考えによれば——我々の言語の論理の誤解に基づいているのだ、ということを示す。（Das Buch behandelt die philosophischen Probleme und zeigt — wie ich glaube — dass die Fragestellung dieser Probleme auf dem Missverständnis der Logik unserer Sprache beruht.）」

第②段落の前半で、「言語の論理の誤解が哲学的問題を生み出す」と主張されている。それゆえ、『論考』は「言語の論理が正しく理解されれば哲学的問題は解決する」と主張すると考えられる。実際、「序文」第⑧段落において、「〔『論考』は〕諸問題を本質的に最終的に解決した」と述べられている。つまり、哲学的問題は不適切な言語論から生み出されるから、適切な言語論を見出せば哲学的問題は解決する。そして、『論考』はそのような言語論を提出している。これが『論考』の主張である。

『論考』の言語論は像（Bild）理論と真理関数（Wahrheitsfunktion）論の2本の柱からなっている。そして、この言語論が成り立つためには世界が特定の構造を持っていることが必要であり、『論考』の言語論が成り立つための前提として『論考』の存在論が主張される。『論考』の存在論において、世界（Welt）、事実（Tatsache）、事態（Sachverhalt）、対象（Gegenstand）、論理空間（der logische Raum）などが導入される。要するに、『論考』全体は次のような構造を持っている。

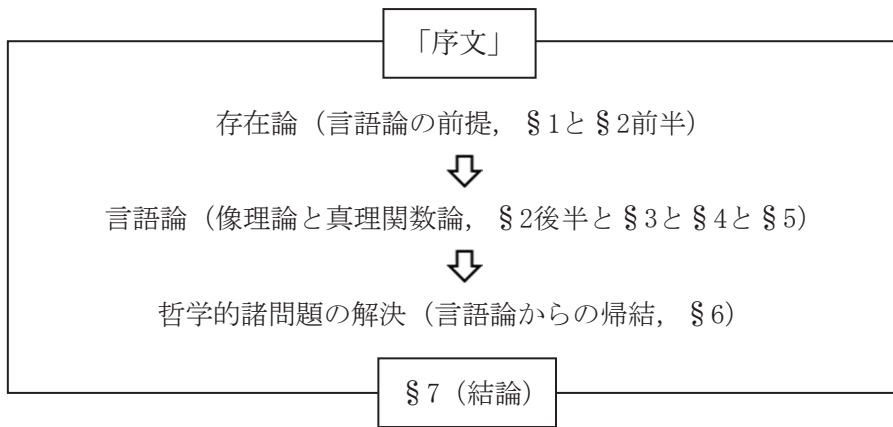


『論考』の構造をもう少し細かく見よう。『論考』は次の7つの主たる命題から構成されており、これらの命題を説明する諸命題がそれぞれにぶらさがっている。

- 「§1 世界は、成立している事柄（was der Fall ist）の総体である。」
- 「§2 成立している事柄すなわち事実とは諸事態の成立である。」
- 「§3 事実の論理像が思考（Gedanke）である。」
- 「§4 思考とは有意味（sinnvoll）な命題（Satz）である。」
- 「§5 命題は、要素命題（Elementarsatz）の真理関数である。」
- 「§6 真理関数（命題）の一般形式は $[p, \xi, N(\xi)]$ である。」
- 「§7 語り得ないことについては沈黙しなければならない。」

『論考』の存在論が述べられるのは、§1と§2前半¹¹⁾(および、それらを説明する諸命題)においてである。『論考』の言語論が述べられるのは、§2後半と§3と§4と§5(および、それらを説明する諸命題)においてである。そして、哲学的諸問題の解決が述べられるのは、§6(および、それを説明する諸命題)である。『論考』末尾の§7はそれを説明する諸命題をまったく持たず、「序文」と呼応して『論考』全体を締めくくる結論である。

つまり、『論考』全体は「序文」と§7に挟まれた次のような構造を持っている。



『論考』の「序文」と§7によって一つのフレーム(枠)ができています¹²⁾。

そして、§6から始まる一連の Paragraph で解決される哲学的諸問題は「論理 (§6.1)」「数学 (§6.2)」「自然科学 (§6.3)」「価値 (§6.4)」「哲学 (§6.5)」に関わる諸問題である。それぞれ次の命題から始まっている。カッコ内に扱っている問題を付記した。

- 「§6.1 論理学の命題はトートロジー (Tautologie) である。」〔論理とは何か〕
- 「§6.2 数学とは一つの論理学的方法に他ならない。」〔数学とは何か〕
- 「§6.3 論理学の外ではすべてが偶然 (Zufall) である。」〔自然科学とは何か〕
- 「§6.4 すべての命題は等価値 (gleichwertig) である。」〔価値とは何か〕
- 「§6.5 答えが言い表し得ないなら、問い (Frage) も言い表し得ない。」〔哲学とは何か〕

11) §2.1「我々は事実の像を作る」(この命題が像理論の始まりである)の直前の§2.063までが「§2前半」である。

12) ダイヤモンド (Diamond (2000) pp.149-150) は「フレーム」に§7の直前の§6.54(はしごの比喩)を含める。しかし、それは『論考』の番号付けを無視した恣意的な読みである。

なお、筆者の『論考』解釈の基本方針は「『論考』全体をできるだけ整合的に読む」ということであるが、「『論考』全体」には「序文」も含める。吉田寛 (2009) の第1章「『論考』の読み方」は、「①『論考』の言語論と倫理のどちらを認めるか」「②『論考』のフレームを重視するか」という2つの基準によって、従来の『論考』解釈を6種類に分類している。筆者の読み方は、吉田自身のものと同じく、「言語論と倫理の両方を認め、フレームを重視する」というタイプの解釈に該当する。

これらの問題が、『論考』の言語論からの帰結として解決される。なお、第②段落前半に言う「哲学的諸問題」を「価値」（§6.41）や「生の問題」（§6.52）に限定する必要はない。論理（§6.1）や数学（§6.2）の本性に関わる問題も適切な言語論によって解決するのだとウィトゲンシュタインは考えていた。

2. 『論考』の言語論と存在論

次に、『論考』全体の趣旨が明記されている「序文」第②段落の後半を訳す。

〔②後半〕「本書の全体としての趣旨は、おおよそ次のように表現できるだろう：そもそも語られ得ることは、明晰に語られ得る。そして、それについて話せないことに関しては、人は沈黙しなければならない。（Man könnte den ganzen Sinn des Buches etwa in die Worte fassen: Was sich überhaupt sagen lässt, lässt sich klar sagen; und wovon man nicht reden kann, darüber muss man schweigen.）」

つまり、『論考』全体の趣旨は、次の2つの主張からなる。

(A) 語り得ること → 明晰に語りうる。〔→明晰に語れ。〕

(B) 語り得ないこと → 沈黙しなければならない。〔→沈黙せよ。〕

かつこの中は『論考』が求めていると思われる態度である。(A)の「語り得ることを明晰に語る」は適切な言語論（すなわち、言語の論理を正しく理解すること）によって可能になる。他方、(B)の「語り得ないことについては沈黙しなければならない（Wovon man nicht reden kann, darüber muss man schweigen.）」は、『論考』末尾の「§7 語り得ないことについては沈黙しなければならない（Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen.）」と呼応している。この「沈黙」をどう解釈するかは『論考』解釈の急所である。「序文」最後の第⑧段落を読む際に（本論文第IV節「沈黙の意味」で）くわしく論じる。

ここでは、「序文」の第③段落と第④段落に進もう。

〔③〕「それゆえ、この本は思考に境界線を引こうとする。というより、思考にではなく、思考されたことの表現に境界線を引こうとする。というのは、思考に境界線を引くためには、その境界線の両側を考えることができなければならない（つまり、考えられ得ないことを、考えることができなければならない）からである。（Das Buch will also dem Denken eine Grenze ziehen, oder vielmehr — nicht dem Denken, sondern dem Ausdruck der Gedanken: Denn um dem Denken eine Grenze zu ziehen, müssten wir beide Seiten dieser Grenze denken können (wir müssten also denken können, was sich nicht denken lässt).）」

〔④〕「それゆえ、境界線は言語の中だけで引くことができるだろう。そして、その境界線の向こう側にあるものは、単に無意味であろう。(Die Grenze wird also nur in der Sprache gezogen werden können und was jenseits der Grenze liegt, wird einfach Unsinn sein.)」

第②段落において「(A) 語り得ること」と「(B) 語り得ないこと」に対する取るべき対照的な態度が主張された。すると、次にやるべきことは「語り得ること」と「語り得ないこと」の間に、すなわち、「(A) 有意味な言語表現」と「(B) 無意味な言語表現」の間に、境界線を引くことである。これが第③段落と第④段落の主張である。

なお、『論考』 § 3.001 は『『ある事態が思考可能 denkbar である』とは、我々はその事態の像 (Bild) を作り得るということである』と述べるが、これは、「語り得ることと語り得ないことの区別」が「思考可能なことと思考不可能なことの区別」とぴったり重なるという主張である。さらに § 3.02 は「思考はそれが考えている状況の可能性を含む。思考可能 (denkbar) なことは、可能 (möglich) でもある」と述べるが、これは、「思考可能なことと思考不可能なことの区別」が「存在可能なことと存在不可能なことの区別」とぴったり重なるという主張である。要するに、『論考』において、「語り得る／語り得ない」の境界線は、「思考可能／思考不可能」「存在可能／存在不可能」の境界線でもある。

そして、「境界線の向こう側にあるもの」とは「(B) 無意味な言語表現」のことであり、第②段落の後半（および『論考』の結論である § 7）で「沈黙しなければならない」と言われたものに相当する。

では、この境界線はどうやって引けるのか。それは、「言語はいかにして意味を持ちうるのか」という問い（言語の有意味性の根源に関する問い）に答えることによってである。『論考』の言語論はこの問いに対し、像理論 (§ 2 後半, § 3) と真理関数論 (§ 4, § 5) という2つの理論によって答えようとする。

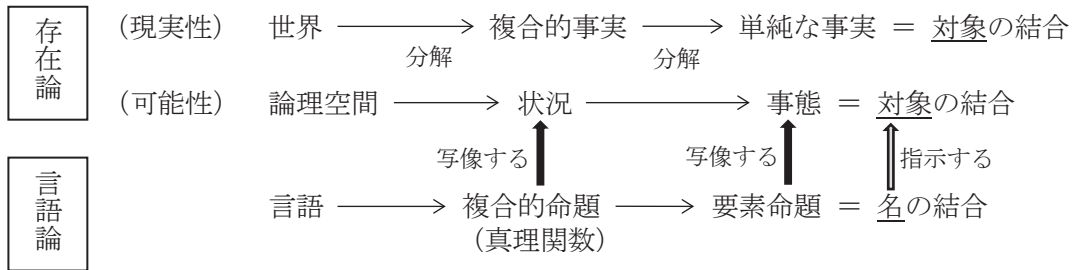
真理関数論によれば、命題 (Satz) は要素命題 (Elementarsatz) の真理関数 (Wahrheitsfunktion) であり (§ 5)、どんな命題も分析していけば必ず要素命題に到達する (§ 4.221)。そして、要素命題とはいくつかの名 (Name) の連結 (Verkettung) である (§ 4.22)。名をさらに分解することはできない (§ 3.26)。

一方、像理論によれば、要素命題は事態 (Sachverhalt) の成立を主張しており (§ 4.21)、事態とはいくつかの対象 (Gegenstand) の結合 (Verbindung) である (§ 2.01)、命題は状況 (Sachlage) すなわち事態の成立・不成立の像である (§ 2.11, § 4.03, § 4.1)。要素命題は一つの事態の成立を主張する (§ 4.2)。そして、名は対象を指示 (bedeuten) する (§ 3.203) が、命題という脈絡の中でのみ名は意味を持つ (§ 3.3)。つまり、命題が状況を写像する (abbilden) ことが先行して、初めて名は対象を指示する¹³⁾。

そして、このような言語論が成り立つために世界 (Welt) は次のようになっていなければならない。(言

¹³⁾ これはフレーゲの文脈原理を引き継ぐものである。

語論の前提としての存在論が主張される。) すなわち、対象は世界の实体 (Substanz) であり (§ 2.021), まったく変化せず, 生成消滅せず, それゆえ増えも減りもしない (§ 2.027). したがって, 現実世界もあらゆる可能世界¹⁴⁾ も同一の諸対象を含んでいる. 対象どうしが結合したものが事態である (§ 2.01) が, どの対象どうしが結合するかという可能性は各対象に内蔵している (§ 2.0121) から, すべての対象が与えられれば, すべての可能的な事態も与えられる (§ 2.0124). 可能的事態のうち成立しているのが事実 (Tatsache) であり (§ 2), 世界 (現実世界) は事実の総体である (§ 1). そして, すべての可能的事態の総体が論理空間 (der logische Raum) であり (§ 1.13), 論理空間は諸事態の成立不成立の可能性 (状況) の総体でもある (§ 2.11). このような存在論が § 1 から § 2 前半までで提示される. 『論考』における存在論と言語論の関係を図示すると, 次のようになる.



ここで説明のために, 可能的な事態が P, Q, R の 3 つしかないと仮定しよう. すると, 事態の成立不成立の可能性の組み合わせ (すなわち状況) は 2 の 3 乗 (すなわち 8) 通りある (§ 4.27). 8 通りの状況は 8 個の可能世界に相当し, そのうちの 하나가現実世界である. そして, 一つの事態に一つの要素命題が対応するから, ここでは要素命題も 3 つしかない. 真理関数とは, 「どの状況のもとで真になるか」という関数である. したがって, 状況が 8 通りあるから, 真理関数は 2 の 8 乗通り (すなわち 256 通り) ある (§ 4.42).

前述のように, 実体たる対象の総体は確定しており (§ 2.027), 可能的事態の総体も確定している (§ 2.0124) から, 結局, 真理関数の総体も確定している. つまり, 『論考』によれば, あらゆる可能な命題の総体は既に確定している. 人類がこれまでに作った命題もこれから作る命題もすべて既に確定している. このような仕方では, 『論考』の言語論によって, 「(A) 語り得ること」の範囲は確定するのである¹⁵⁾.

¹⁴⁾ ただし, 「可能世界」という語は『論考』に登場しない. 「状況 (Sachlage)」という語がほぼ「可能世界」に相当する.

¹⁵⁾ ただし, 要素命題の具体例は『論考』では挙げられていない. 「言語が有意味である以上, 要素命題が存在するはずだ (どんな命題も分析すれば, 要素命題の真理関数であることが判明するはずだ)」と『論考』を書いた時期のウィトゲンシュタインは考えていた. この考えは後期ウィトゲンシュタインにおいては放棄される.

Ⅲ フレーゲやラッセルとの関係（【第3グループ】第⑤⑥段落）

「序文」の第3グループではフレーゲとラッセル¹⁶⁾が言及される。

〔⑤〕「私の試みが他の哲学者たちの試みとどの程度一致しているかは、判断したいとは思わない。確かに、私が本書で書いたことは、個々の点では新しさをまったく持たない。それゆえ私は出典も挙げない。なぜなら、私が考えたことを誰か他の人が私より先に考えていたかどうかは、私にはどうでもいいことだからだ。（Wieweit meine Bestrebungen mit denen anderer Philosophen zusammenfallen, will ich nicht beurteilen. Ja, was ich hier geschrieben habe macht im Einzelnen überhaupt nicht den Anspruch auf Neuheit; und darum gebe ich auch keine Quellen an, weil es mir gleichgültig ist, ob das was ich gedacht habe, vor mir schon ein anderer gedacht hat.）」

〔⑥〕「ただ、私の考えを刺激したのが、大部分、フレーゲの素晴らしい諸作品と私の友人バートランド・ラッセル氏の諸著作だということだけは言っておきたい。（Nur das will ich erwähnen, dass ich den grossartigen Werken Freges und den Arbeiten meines Freundes Herrn Bertrand Russell einen grossen Teil der Anregung zu meinen Gedanken schulde.）」

ウィトゲンシュタイン自身が「影響を受けた」人物として（1931年、42歳のときに）挙げているのは、フレーゲ（哲学者）、ラッセル（哲学者）、ショーペンハウアー（哲学者）、ヴァイニンガー（思想家）、シュペンゲラー（思想家）、クラウス（文筆家）、ボルツマン（物理学者）、ヘルツ（物理学者）、ロース（建築家）、スラッフア（経済学者）の10人である¹⁷⁾。このうち『論考』において言及されるのはフレーゲ、ラッセル、ヘルツの3人だけである。フレーゲは17個のパラグラフで、ラッセルは29個のパラグラフで、そして、ヘルツは2個のパラグラフで、言及されている。このように、フレーゲとラッセルへの言及が抜きんでている¹⁸⁾。

大学生のときウィトゲンシュタインは工学を専攻していたが、やがて、数学へ、さらに数学の基礎としての論理学へ、関心が移っていった¹⁹⁾。その際、彼はフレーゲの『算術の基本法則²⁰⁾』（1893年刊）と

16) Bertrand Russell, 1872年生～1970年没。イギリスの論理学者・哲学者。

17) Wittgenstein (1977) p. 19 (邦訳 p. 52)。ただし、スラッフアからの影響は『論考』に対してではなく、後期ウィトゲンシュタインの『哲学探究』に対するものである。

18) なお、『論考』では、この他に、カント（哲学者）、ホワイトヘッド（哲学者）、マウトナー（哲学者）、ムーア（哲学者）、ダーウィン（生物学者）への言及があるが、いずれも1～2回である。

19) ウィトゲンシュタインの生涯については Monk (1990) と McGuinness (1988) という2つのくわしい伝記に依る。彼は最初ドイツのシャルロテンブルク工科大学で学び、次にイギリスのマンチェスター大学工学部で学んでいる。

20) Frege (1893)。

ラッセルの『数学の諸原理²¹⁾』（1903年刊）から学んでいた。そして、22歳（1911年）のときにフレーゲ（当時63歳）を訪問し、自分の関心事を話したところ、ケンブリッジ大学（イギリス）のラッセル（当時39歳）のもとで学ぶよう勧められた。そして、23歳から25歳までラッセルのもとで学び（その際、ラッセルが1910年に公刊した『数学原理²²⁾』の内容を学んだ）、ラッセルから才能を高く評価された。（フレーゲとはその後も手紙のやりとり²³⁾を続け、何度か会って議論している²⁴⁾。）

最初、ウィトゲンシュタインは論理の本性について考察していたが、やがて、「言語が意味を持つのはいかにしてか」という言語の有意味性の根源について考察するようになり、さらに、「言語が意味を持つためには、世界はどのような構造を持っていなければならないか」という存在論についても考察するようになっていった²⁵⁾。

1914年（当時25歳）に第一次世界大戦が勃発すると、ウィトゲンシュタインはイギリスを離れオーストリア軍に志願兵として従軍したが、戦場で哲学的考察を続けた。そして、1918年（当時29歳）の8月、軍の休暇中に『論考』を完成した。当時の考察の過程を記録したメモ（『草稿1914-1916』²⁶⁾として後に公刊された）が残っているが、1916年6月4日～9月20日のブルシーロフ攻勢²⁷⁾という激しい戦闘を経験したところから、言語論や存在論よりも「神」や「生の目的」に関する記述が増え、それらは『論考』の§6.4や§6.5（および、それらを説明する諸命題）の中に取り入れられている。

「神」や「生の目的」に関する記述の源泉はフレーゲやラッセルではない。彼が高校生のころに読んでショーペンハウアー『意志と表象としての世界』や従軍中に読んでトルストイ『要約福音書』、エマーソン『随筆集』、ニーチェ『アンチ・キリスト者』などからの刺激による。尤も、ウィトゲンシュタインにはもともと自分の生き方に対する実存的関心が強く、10代するとき二人の兄が自殺したこともあって、彼自身も自殺の衝動に悩まされていた²⁸⁾。

『論考』の§6.4から始まる部分（価値論）や§6.5から始まる部分（哲学論）を『論考』言語論の帰結として読めるかどうかは解釈上の大きな問題である。『論考』の中での「論理や言語に関する議論」と比べて、価値論や哲学論は文章の雰囲気がかたごとく変わるから、その部分を見捨てる解釈者²⁹⁾や論理や言語とは別なもの（たとえばショーペンハウアーやトルストイからの影響）からの帰結として読む解

21) Russell (1903).

22) Whitehead & Russell (1910).

23) フレーゲ (2002) pp. 263-301.

24) アンスコム&ギーチ (1992) p. 242.

25) 飯田隆 (1997) p. 328.

26) Wittgenstein (1961).

27) ウィトゲンシュタイン (2016) の星川啓慈・石神郁馬による「解説」が詳しい。ちなみに「ブルシーロフ」とは攻撃をおこなったロシア軍の将軍の名前である。

28) 野家啓一 (2011) pp. 35-37. また、ウィトゲンシュタインの自分の生き方に対する実存的関心は、彼の『秘密の日記』（ウィトゲンシュタイン (2016)）や『哲学宗教日記』（ウィトゲンシュタイン (2005)）によく現れている。

29) 最初に (1920年代に) 『論考』に注目したウィーン学団の論理実証主義者たちである。

釈者³⁰⁾もいる。しかし、筆者の解釈によれば、『論考』全体は統一的に解釈でき、『論考』の価値論や哲学論も言語論から導き出すことができる。もしウィトゲンシュタイン自身がそう考えていなかったら、彼は『論考』を完成させることができなかつたであろう。彼の中にある「数学・論理・言語への関心」と「己の実存に関する関心」とが統一できた（と信じた）から、彼は『論考』を完成できたのである。この点に関しては、次の第IV節「沈黙の意味」で論じる。

IV 沈黙の意味（【第4グループ】第⑦⑧段落）

1. 表現の巧拙

「序文」の最後の部分に移ろう。まず第⑦段落を訳す。

〔⑦〕「本書に価値があるとしたら、その価値には二種類ある。第一に、この作品には考えが表現されており、その考えが上手に表現されているほど、すなわち、表現が核心を突いているほど、その価値は大きくなる。このような種類の価値である。——この点に関して、可能性を十分に発揮できなかったことを私は自覚している。それは、単に、この課題に取り組む私の力量が乏しすぎるからである。——他の人が来て、もっと上手にやってくれることを願う。（Wenn diese Arbeit einen Wert hat, so besteht er in Zweierlei. Erstens darin, dass in ihr Gedanken ausgedrückt sind, und dieser Wert wird umso grösser sein, je besser die Gedanken ausgedrückt sind. Je mehr der Nagel auf den Kopf getroffen ist. — Hier bin ich mir bewusst, weit hinter dem Möglichen zurückgeblieben zu sein. Einfach darum, weil meine Kraft zur Bewältigung der Aufgabe zu gering ist. — Mögen andere kommen und es besser machen.）」

この第⑦段落は、「表現の巧さという価値に関して『論考』は不十分だ」と述べている。のちに（1931年、42歳のとき）彼は「私は自分が表現したいことを、いつも半分しか表現できていない。いや、実際は半分どころか、10分の1しか表現できていないのかもしれない³¹⁾」と書いている。言いたいことを十分に表現する技術を自分が持っていないという自覚を『論考』完成の時期（1918年、29歳のとき）に既に持っていたということである。

第⑦段落は「本書の価値には二種類ある」と述べている。一つの価値は「表現の巧さ」であって、この点では不十分だと自認している。では、もう一つの価値に関してはどうだろうか。それを述べているのが次の第⑧段落である。

³⁰⁾ ショーペンハウアーからの影響を強調するのはワイナー（2003）である。トルストイからの影響を強調するのは鈴木（2021）である。

³¹⁾ Wittgenstein (1977) p. 18 (邦訳 p. 51).

2. 『論考』の持つ最大の価値

「序文」最後の第⑧段落は慎重に読む必要がある。まず訳す。

〔⑧〕「他方、本書で述べられた考えが真理であることは、侵しがたく決定的だと私に思われる。それゆえ、私は諸問題を本質的に最終的に解決したと思う。そして、解決したという点で私が間違っていないければ、これら諸問題の解決によっていかにわずかなことしかなされていないか、ということを示している。この点に本書の2つめの価値がある。（Dagegen scheint mir die Wahrheit der hier mitgeteilten Gedanken unantastbar und definitiv. Ich bin also der Meinung, die Probleme im Wesentlichen endgültig gelöst zu haben. Und wenn ich mich hierin nicht irre, so besteht nun der Wert dieser Arbeit zweitens darin, dass sie zeigt, wie wenig damit getan ist, dass diese Probleme gelöst sind.）」

ここでは2つのことが言われている。

(1) 『論考』で書かれていることは真理であり、哲学的諸問題を完全に解決した。

(2) しかし、「哲学的諸問題の解決によって達成されたことは極めてわずかだ」ということを『論考』は示している。

そして、ウィトゲンシュタインは、(1)ではなく(2)が『論考』の最大の価値であると第⑧段落で主張しているのである。

まず(1)に関してだが、なぜ彼はここまで自信を持っているのか。本論文第2節第1項「『論考』の構造」で明らかにした『論考』全体の構造を踏まえれば、彼の自信の根拠は次のようなものと思われる³²⁾。

我々は有意義な言語を持っている。（議論の出発点としての所与）

→では、言語はいかにして意味を持ち得るのか（言語の有意義性の根源に関する問い）

→この問いに答え得るのは『論考』の言語論（像理論と真理関数論）だけである。

→それゆえ、『論考』の言語論も（その前提をなす）存在論も真理である。

→したがって、『論考』の言語論からの帰結（哲学的諸問題の解決）も真理である。

³²⁾ ただし、彼のこの自信は40歳で哲学に復帰するころには失われていた。後期の主著である『哲学探究』（Wittgenstein (1953)）の「序文」（1945年に執筆）において「16年前〔1929年〕に再び哲学に関わり始めて以来、あの最初の本〔『論考』〕に書き記したことの内にいくつかの重大な間違いがあることを私は認識せざるを得なかった」と書いている。彼は『論考』の言語論（像理論と真理関数論）に誤りを見出し、「言語ゲーム（Sprachspiel）」という言語の新たな捉え方を軸に後期哲学を展開していく。

しかし、『論考』が最大の価値を置くのは、哲学的諸問題の解決それ自体ではない。「この解決によって達成されたことはわずかだ」ということを示した点に最大の価値を置いている。哲学的諸問題の解決にこれだけの自信を持っているにもかかわらず、そこに『論考』の最大の価値があるのではないと言っているのである。

では、何と比べて「わずか」なのか。「序文」第②段落で述べられているように、『論考』全体の趣旨は、「(A) 語り得ることは、明晰に語りうる。他方、(B) 語り得ないことについては、沈黙しなければならない」ということである。「(A) 語り得ること」を明晰に語る（すなわち、言語の論理を正しく理解することによって哲学的諸問題は解決した。とすれば、それが「わずか」であるのは、「(B) 語り得ないこと」と比べての話だと考えられる。つまり、『論考』は「(B) 語り得ないこと」（「沈黙すべきこと」）の大きさを示したのであり、そして、そのことが『論考』の最大の価値だと第⑧段落は主張しているのである。

3. 語ると示す

では、「沈黙すべきこと」とは何であり、それが「大きい」とはどういうことか。鍵になるのは『論考』を貫く「語る (sagen)」と「示す (zeigen)」の対比である³³⁾。この対比はまず「論理形式」に関して言われる。

像 (Bild) と現実 (Wirklichkeit) は写像形式 (Form der Abbildung) を共有する (§ 2.17)。空間的形式を持つ像は空間的な現実を写像でき、色の形式を持つ像は色に関する現実を写像できる (§ 2.171)。命題 (という像) が現実と共有する写像形式は論理形式 (der logische Form) である (§ 4.12)。しかし、命題は論理形式を描写 (darstellen) できない。そのためには論理の外すなわち世界の外に行かねばならないからである (§ 4.12)。

名 (Name) という記号は、それが表し (bezeichnen) ているものが対象 (Gegenstand) であることを示し (zeigen)、数記号 (Zahlenzeichen) はそれが表しているものが数 (Zahl) であることを示している (§ 4.126)。つまり、示されているのは、言語の側ではシンボル (Symbol) の相貌 (Zug) であり (§ 4.126)、世界の側では事実 (Tatsache) の相貌である (§ 4.1221)。

こうして、論理形式は命題によって語る (sagen) ことはできず、命題において示される (zeigen)。それゆえ、次のように言われる。

「§ 4.121 命題は論理形式を描写 (darstellen) できない。論理形式は命題のうちに反映されている (sich spiegeln)。[...] 命題は現実の論理形式を示す (zeigen)。命題はそれを提示する (aufweisen)。」

³³⁾ なお、「語る」と訳した原語は「sagen」「reden」「sprechen」であり、「描写する (darstellen)」「記述する (beschreiben)」「言い表す (aussprechen)」も同じ意味で使われている。また、「示す (zeigen)」と同じ意味で「提示する (aufweisen)」という語も使われている。

「語る」と「示す」をすどく対比することは『論考』を貫く根本的な主張である。実際、完成した『論考』の原稿をフレーゲとラッセルに送ったすぐあとに、ウィトゲンシュタインはラッセル宛ての手紙の中で次のように書いている。

「主要な点は、命題（すなわち言語）によって表現され得る（すなわち考えられ得る）ものと命題によって表現され得ず示され得るだけのものについての理論なのです。これが哲学の主要問題であると私は思います³⁴⁾。」

この手紙は英語で書かれているが、ウィトゲンシュタインは「表現され（expressed）」のうしろに括弧に入れてドイツ語で「(gesagt)」と付記し、「示され（shown）」のうしろに「(gezeigt)」と付記している。彼がラッセルに対して「語る（sagen）」と「示す（zeigen）」の対比を強調していることが分かる。

言語を可能ならしめるのは、言語と世界の間共通の論理形式があることである。すなわち、命題と現実による論理形式の共有である。これが『論考』の像理論という言語論の根本テーゼである。しかし、語ることを可能ならしめるもの（論理形式の共有）自体を語ることはできない。§4.1212は次のように言う。

「§4.1212 示され得るものは、語られ得ない（Was gezeigt werden kann, kann nicht gesagt werden.）」

これに対してラッセルは、「言語に階層（hierarchy）を設ければ〔メタ言語³⁵⁾を想定すれば〕語るることができる」と『論考』を批判する³⁶⁾が、ウィトゲンシュタインの考えによれば、メタ言語であろうが、何であろうが、そもそも言語を可能ならしめるのは何か（有意味性の根源）が問題なのであって、メタ言語を持ち出すことはこの問題を回避するだけだということになる。

しかし、我々が言語を理解している以上、我々は言語と世界が共有する論理形式を理解しているはずである。（その理解の内容を語ることはできないが。）この「語り得ないが理解している」という知のあり方を『論考』は「示されている」と呼んでいるのである。

4. 世界の存在

言語を可能ならしめるのは論理形式だけではない。世界（Welt）の存在と私（Ich）の存在も言語を可能ならしめる条件である。つまり、「語る」と「示す」の区別は、「世界」や「私」にも当てはまる。

34) 1919年8月19日付けの手紙。Wittgenstein (1974) p. 71.

35) ただし、『論考』が公刊された1922年当時、「メタ言語」という用語はまだ現れていない。

36) Russell (1922) pp. 22-23 (邦訳 pp. 177-179).

まず「世界」の存在について検討しよう。

『論考』 §5.552 は「存在」と「論理」と「経験」という三者の関係について次のように述べる。

「§5.552 論理を理解するために必要な『経験 (Erfahrung)』は、何かがかくかくだ (etwas verhält sich so und so) という経験ではなく、何かが存在する (etwas ist) という経験である。しかし、これは経験ではない。論理は、何かがこのようである (etwas ist so), というどんな経験よりも前にある。論理はいかに (Wie) [すなわち経験] よりも前にあり、何 (Was) [すなわち存在] よりも前にはない。」

つまり、『論考』によれば、「何かがある (存在) →論理 (言語) →このようである (経験)」という順序がある。論理 (言語) は経験に先立つ。そして、存在は論理 (言語) に先立つ。しかし、存在は言語より前にあるから、存在を言語によって語ることはできない。結局、存在は「語ること」を可能ならしめるが、存在自体を語ることはできない。このように主張されている。

では、この「存在」とは何か。本論文第Ⅱ節第2項「『論考』の言語論と存在論」で述べたように、『論考』における実体は対象 (Gegenstand) であるから、この「語ることを可能ならしめる存在」とは対象の存在のことか。そうではない。要素命題を構成する名は確かに対象を指示する。しかし、それは要素命題が事態を意味するということが先行してはじめて (つまり、名は命題の中でのみ) 対象を指示することができる (§3.3の文脈原理)。とすれば、「語ることを可能ならしめる存在」とは、事実 (すなわち成立している事態) の総体としての世界 (Welt すなわち現実世界) の存在のことだと考えられる。

5. 私に示される

さらに、『論考』において「世界の存在」は「私 (das Ich) の存在」でもある。どういうことか。『論考』の言語論は §5.6 (および、それを説明する諸命題) で終わるが、そこでは「独我論 (Solipsismus)」の議論がおこなわれ、次の主張がなされる。

「世界は私の世界である。(Die Welt ist meine Welt.)」 (§5.62)

「世界と生は一つである。(Die Welt und das Leben sind Eins.)」 (§5.621)

「私は私の世界である。(Ich bin meine Welt.)」 (§5.63)

簡略化すると、次の主張がなされている。

世界 = 私の世界

世界 = 生 (私の生)

私 = 私の世界

これら3つの主張から次の同一性が帰結する。これが『論考』特有の独我論である。

世界 = 私 = 生

したがって、語ることを可能ならしめる（が、それ自体は語り得ない）「世界の存在」はそのまま「私の存在」であり「（私の）生の存在」である。

しかし、問題は、独我論というきわめて形而上学的な主張がどのようにして『論考』の言語論から導き出されるのか、ということである。これは『論考』解釈上の難問である。本論文では「語ると示すの違い」に着目した以下のような解釈を提起したい。

§ 5.62 では次のように述べられている。

「世界が私の世界であることは、この言語（私が理解する唯一の言語）の限界が私の世界の限界を意味することのうちに示されている。（Dass die Welt *meine* Welt ist, das zeigt sich darin, dass die Grenzen *der* Sprache (der Sprache, die allein ich verstehe) die Grenzen *meiner* Welt bedeuten.）」
（§ 5.62）

ここで「世界が私の世界である」ことの根拠として、「私」と言語との関連が言われている。しかし、それはどのような関連なのか。本論文第Ⅱ節第2項「『論考』の言語論と存在論」で述べたように、『論考』において、「語り得る／語り得ない」の境界線は「思考可能／思考不可能」および「存在可能／存在不可能」の境界線でもあるから、確かに言語と世界の間には密接な関連がある。しかし、世界について語るために、いかなる意味で「私」が必要なのか。

『論考』の言語論の冒頭は「§ 2.1 我々は事実の像を作る。（Wir machen uns Bilder der Tatsachen.）」という命題である。この命題が「像（Bild）」という語の『論考』における初出である。像という一つの事実（「§ 2.141 像は一つの事実である。」）が他の事実を写像できるのは、両者が論理形式を共有するからだが、論理形式が共有されているだけでは像にならない。同じ論理形式を共有する事実のペアは世界に複数あるからだ。§ 2.1 が述べているのは、「像が生まれるためには、写像をおこなう我々が必要だ」ということである。写像主体としての我々が必要なのである。

しかし、「我々」は「私」とは違う。すると、§ 5.62 の「私」を「我々」に置き換えて、「世界が我々の世界であることは、この言語（我々が理解する唯一の言語）の限界が我々の世界の限界を意味することに示されている」と述べられるべきだったのか。

そうではない。ここで鍵を握るのは「語る」と「示す」の対比である。確かに、語るのは我々である。しかし、示されるのは我々に対してではなく、あくまでも私に対してである。この点に「示される」という知のあり方の特徴がある。本節第3項「語ると示す」で論じたように、示されるのは、言語の側ではシンボルの相貌（Zug）であり（§ 4.126）、世界の側では事実の相貌である（§ 4.1221）。そして、こ

の「相貌」をウィトゲンシュタインは「人相 (Gesichtszüge)」に喩えている (§ 4.1221)。相貌を見てとるのは、あくまでも私である。私に見えているというのが「示されている」という知のあり方である。要するに、「語る」と「示す」には次の対比がある。

語る …… 私が語る、我々が語る

示す …… 私に示される

私に対して(論理形式が)示されることによって、私が語ることが可能になり、ひいては、我々が語ることが可能になる。このような順序がある。このような意味で、「私の存在」は言語を可能ならしめる条件である。それゆえ、§ 5.62 において「我々が理解する言語」ではなく「私が理解する言語」と述べられたのである。こうして、『論考』の独我論は『論考』の言語論から帰結する。

そして、前述の「私は私の世界である」 (§ 5.63) とは、「このような私 (das Ich) は、世界の中の一部分 (人間や心理学的自我) ではなく、世界の限界 (Grenze) たる形而上学的主体 (das metaphysische Subjekt) である」 (§ 5.641) という意味である³⁷⁾。

このように、「語ること」が可能であるために「世界の存在」と「私の存在」が前提される。そこで「世界」や「私」は「世界=生=私」という同一性が成り立つような「世界」と「私」である。要するに、「世界」と「私」の存在は、語り得ないが(言語のうちに)示されている。

6. 『論考』の価値論

では、第⑧段落が主張する「語り得ないこと(沈黙すべきこと)の大きさ」とはどういうことか。このことを明らかにするには、『論考』の価値論 (§ 6.4 から始まる一連のパラグラフ) や哲学論 (§ 6.5 から始まる一連のパラグラフ) の内容を検討することが必要である。まず、『論考』の価値論が『論考』の言語論からどのように帰結するのかを見よう。

『論考』の言語論によれば、語り得ることはすべて別様でありうる。なぜなら、(トートロジーと矛盾以外の) どんな命題も真と偽の両方の真理値を取り得なければならぬからである(命題の二極性)。そして、本論文第Ⅱ節第2項『『論考』の言語論と存在論』で述べたように、『論考』では、「語り得る=考え得る=あり得る」であるから、世界で実際に起こっていることはすべて別様でありうる、すなわち、すべては偶然(zufällig)である³⁸⁾。「世界の中ではすべてがあるようにあり、起こるように起こる(In der Welt ist alles wie es ist und geschieht alles wie es geschieht.)」 (§ 6.41) ののである。どんな事実も

³⁷⁾ 『論考』の独我論の議論 (§ 5.6 から始まる一連のパラグラフ) は前半 (§ 5.61, § 5.62) と後半 (§ 5.63, § 5.64) からなる。前半では「世界は私の世界である」ということが、後半では「私は私の世界である」ということが主張され、後半末尾の § 5.64 では「独我論と实在論の一致」が主張される。言わば、私は世界に満ちており (§ 5.61 と § 5.62)、かつ、私は世界の中にいない (§ 5.63)。それゆえ、私と世界は一致する (§ 5.64)。このような議論がなされている。

³⁸⁾ 「§ 6.3 論理の外ではいっさいが偶然 (Zufall) である。」とあるように、『論考』では論理的必然性以外の必然性は認められない。

「こうでなければならない」ということはなく、別様でありうる。

したがって、世界の中に価値（Wert）は存在しない。世界の中に存在するのは事実だけであり、その事実は存在しないことも可能だからである。それゆえ、「すべての命題は等価値である。（Alle Sätze sind gleichwertig.）」（§6.4）ということになる。

にもかかわらず、『論考』は、「価値を持つ価値（ein Wert, der Wert hat）」（§6.41）という呼び名の価値の存在を認める。そして、価値の担い手（Träger）は意志（Wille）である（§6.423）と言う。『論考』の §6.4 までの議論の流れからすれば、この「意志」とは、「世界＝私＝生」という関係が成り立つ「私」すなわち「形而上学的主体」のことだと考えられる。本節第5項「私に示される」で述べたように、この「私」について語ることはできない。しかし、その存在は言語のうちに示されている。そして、善き意志（das gute Wollen）によって世界全体が強まり（zunehmen）、幸福な人の世界（die Welt des Glücklichen）になることが、『論考』の認める価値である（§6.43）。つまり、「世界の中の個々の事実（それらは語り得る）と価値とはまったく関係がない」という特異な価値論が『論考』で主張されている。

そして、価値についての議論の中で「神秘（das Mystische）」（§6.44）という語や「生の謎（das Rätsel des Lebens）」（§6.4312）という語が現れる。

「§6.44 神秘とは、世界がいかにあるかではなく、世界があるということである。（Nicht *wie* die Welt ist, ist das Mystische, sondern *dass* sie ist.）」

「世界＝私＝生」という同一性を踏まえると、これは次のように言い換えることができる。

「神秘とは、私がいかにあるかではなく、私があるということである。」

「神秘とは、生がいかにあるかではなく、生があるということである。」

ここで、本節第4項「世界の存在」で述べた「存在→論理→経験」という順序を思い出そう。「いかにあるか」を教えるのは経験である。経験が可能であるためには言語（論理）が先行しなければならず、言語が可能であるためには存在が先行しなければならない。本節第5項「私に示される」で述べたように、この存在とは「世界の存在」「私の存在」「生の存在」である。要するに、経験が可能であるために、そして、そもそも言語（論理）が可能であるために、神秘（世界の存在・私の存在・生の存在）が先行しなければならないと『論考』は主張しているのである。

そして、「世界がいかにあるかは、より高い次元（das Höhere）からすれば完全にどうでもよいことではない」（§6.432）から「命題は、より高い次元をまったく表現できない」（§6.42）と『論考』は言う。「いかにあるか」（経験）や命題（言語）に先行するのは「あるということ」（存在）であった。とすれば、この「より高い次元」とは「世界の存在・私の存在・生の存在」すなわち「神秘」のことだ

と考えられる。そして、「より高い次元」という呼び名から、この「神秘」が『論考』の言う「価値を持つ価値」であることが分かる。言い直せば、「世界＝私＝生」という同一性が私に見えているとき、「世界」は「強まった世界、幸福な人の世界」（§6.43）なのである。

「生の謎」（§6.4312）という語についても、同様に、「私の謎」「世界の謎」と書き換えることができる。すなわち「世界」「私」「生」の存在に関する次のような謎である。

なぜ、世界は存在するのか。

なぜ、私は存在するのか。

なぜ、生は存在するのか。

これらの問い（「世界＝私＝生」という同一性のもとでは、一つの問い）が「生の謎」である。つまり、「生の謎」は「世界の存在の謎」であり「私の存在の謎」でもある。では、『論考』において、この謎は解かれるのか。

7. 『論考』の哲学論

「生の謎」について考えるには、『論考』の哲学論（§6.5から始まる一連のパラグラフ）を見る必要がある。世界の存在・私の存在・生の存在は、言語を可能ならしめる条件である。しかし、言語を可能ならしめる条件それ自体は語り得ない。とすれば、「生の謎」「世界の存在の謎」「私の存在の謎」はそれを述べることもそれに答えることもできないはずである。実際 §6.5でウィトゲンシュタインは次のように言う。

「謎は存在しない。（*Das Rätsel gibt es nicht.*）」（§6.5）

では、「生の謎は疑似問題（にせものの問題）だ」というのが『論考』の結論なのか。確かに §6.53で述べられる「哲学の正しい方法」は、そのような解釈を誘う。

「§6.53 哲学の正しい方法（*die richtige Methode*）は本来次のようなものであろう。すなわち、語られ得ることしか語らない（*Nichts zu sagen, als was sich sagen lässt*），それゆえ、自然科学の命題しか——それゆえ、哲学と関係のないことしか——語らない。そして、誰かが形而上学なこと（*etwas Metaphysisches*）を語ろうとしたら、彼が自分の命題の中のいくつかの記号に意味（*Bedeutung*）を与えていないということを彼に向かって証明（*nachweisen*）する。この方法は彼にとって不満足なものだろう。——彼は哲学を教わっているという気持ちにならないだろう。——しかし、これが唯一の厳密に正しい方法であらう。」

このパラグラフは「語り得ることだけを語る。そして、語り得ないことを語ろうとする人がいたら、『君は無意味なことを言っている』と証明してやる。これが哲学の唯一の正しい方法だ」と主張している。とすれば、「生の謎」のような語り得ないことを語るのは間違っている、ということになりそうである。また、§ 6.52 や § 6.521 の「生の問題 (Lebensprobleme)³⁹⁾」の解決についても次のように言われる。

「生の問題の解決 (Lösung) は、生の問題が消滅 (Verschwinden) する際に、気づかれる。」 (§ 6.521)

『論考』「序文」第②段落によれば、哲学的諸問題は言語の論理の誤解から生じるのであり、言語を正しく理解すれば、哲学的諸問題は解決するのであった。とすれば、「生の謎」（「生の問題」）も言語の論理を正しく理解すれば消滅するような疑似問題だということになるのか。

そうはならない。なぜなら、ウィトゲンシュタインは § 6.521 に続けて § 6.522 で次のように明言しているからである。

「§ 6.522 ただし、言い表しえないものは存在する。それは示される。それは神秘である。(Es gibt allerdings Unaussprechliches. Dies zeigt sich, es ist das Mystische.)」

本節第 6 項「『論考』の価値論」で述べたように、神秘とは世界の存在・私の存在・生の存在のことである。これらは語り得ない。しかし、示される。ここでも「語る」と「示す」の対比が重要なポイントである。(§ 6.522 で「示す」という語が強調されていることにも注目すべきである。)

世界の存在・私の存在・生の存在は、言語を可能ならしめるものであり、我々が言語を理解しているときに、(示されるという仕方)で我々が知っていることである。世界の存在・私の存在・生の存在そのものは語り得ないが、それらの存在は言語のうちに示されている。それは、ちょうど、命題と事実が共有する論理形式(命題が事実の像であるための条件)そのものが、語ることはできないけれど命題のうちに示されている(そうでなければ、私は命題を理解できない)のと同様である。これは本節第 3 項「語ると示す」で述べたように、『論考』言語論の基本構図である。

すると、『論考』哲学論の末尾にある § 6.54 (はしごの比喩)の解釈も定まる。

「§ 6.54 私を理解する人は、私の諸命題を通して (durch) —— それらの上に立ち (auf) —— それらの先へ (über) 乗り越えた (hinaussteigen) とき、ついにそれらが無意味 (unsinnig) であることを認識 (erkennen) する。そうすることによって私の諸命題は解明をおこなう (erläutern)。 (いわば、彼ははしご (Leiter) を登り切った (hinaufsteigen) あと、はしごを投げ捨て (wegwerfen)

³⁹⁾ 「生の問題」も「私の問題」「世界の問題」と言い換えることができる。

なければならない。)彼は私の諸命題を克服 (überwinden) しなければならない。そのとき彼は世界を正しく (richtig) 見る (sehen).」

この §6.54 では次の2つのことが言われている。

- (1) 『論考』の諸命題は無意味 (unsinnig) である。
- (2) 『論考』の諸命題は解明 (Erläuterung) をおこなう。(すなわち、はしごを登り切った読者は世界を正しく見る.)

『論考』は言語を可能ならしめる条件を明らかにするが、それらの条件そのものは語り得ないものである。ところが、『論考』自体は、語り得ないものを臆面もなく語っている。本論文で何度も引用したように、『論考』は「論理形式」について語り、「世界」「私」「生」について語っている。「語り得ること」と「語り得ないこと」の間に『論考』が引いた境界線によれば、『論考』の諸命題が語ろうとしたことは「語り得ないこと」に属している。つまり、『論考』の諸命題を読むことによって、『論考』の諸命題が無意味であることが認識される、というねじれた関係がある。

しかし、『論考』は同時に、言語を可能ならしめる条件(論理形式、世界の存在・私の存在・生の存在)が言語のうちに示されていることに気づかせてくれる。これが、本論文第1節「解明としての哲学」で述べた「哲学の仕事の本質である解明」 (§4.112) である。「気づかせる」というのは、「描く」こととも「教える」こととも異なる。それは情報の伝達ではない。喩えてみれば、『論考』の諸命題は料理のレシピのようなものである。レシピをいくら読んでも味はしない。レシピに味を求めるのは無意味である。しかし、レシピを頼りに料理を作って味わえば、味が分かる⁴⁰⁾。『論考』の諸命題がそのまま何かを教えてくれるのではない。『論考』の諸命題を頼りに読者が自分自身の言語使用・言語理解の実際によく目を凝らすことによって、言語を可能ならしめる条件(論理形式、世界の存在・私の存在・生の存在)が見えてくる。語り得ないが示されているそれらのものが見えてくる。言語のうちに常に示されているはずなのに「見えてくる」と言うのは、普段、見えなくなってしまうからである。その原因は、語られていることだけに我々の意識が向きがちだということにある。「常に示されているにもかかわらず見えなくなってしまうもの」に気づかせること、それが『論考』の言う「哲学の仕事の本質である解明」である。

§6.54 では、『論考』というはしごを登り切ったとき「世界を正しく見る」と述べられている。「世界=私=生」という同一性を踏まえれば、これはそのまま「私を正しく見る」「生を正しく見る」ということでもある。そして、ここで「見る (sehen)」という語が使われているのは、そのとき「世界の存在・私の存在・生の存在」が示されるからである。本節第5項「私に示される」で述べたように、示されるのは相貌 (Zug) だから「見る」という語がふさわしい。

では、「正しく見る」とはどういうことか。「いかにあるか」ではなく、「永遠の相のもとに」、「限界

⁴⁰⁾ もちろん料理に失敗する場合もある。その場合、「語り得ないが示されているもの」に読者は気づかない。

付けられた全体として」（§6.45）世界・私・生を見ることである。（語り得る）「いかに」でなく、（語り得ないけれど、示されている）「ある（世界の存在・私の存在・生の存在）」すなわち「神秘」が見えるということである。言い直せば、「世界＝私＝生」という同一性が見えるということである。これが「正しく」見るということである。

そして、そのとき、私はもはや「なぜ世界は存在するのか」「なぜ私は存在するのか」「なぜ生は存在するのか」（生の謎）を問おうとしないであろう。なぜなら、本節第6項「『論考』の価値論」で述べたように、「世界＝私＝生」という同一性が私に見えているときの「世界の存在・私の存在・生の存在」（神秘）こそが、『論考』 §6.41の言う「価値を持つ価値」だからである。この価値の大きさが、第⑧段落が主張する「語り得ないこと（沈黙すべきこと）の大きさ」なのである。

8. 沈黙と神秘

最後に、§7（『論考』の結論）や「序文」第②段落の「語り得ないことについては沈黙しなければならない」に言う「沈黙（schweigen）」とは何であるかを検討して、『論考』全体の目的を明らかにしよう。「序文」第②段落によれば、『論考』全体の趣旨は「語り得ることは、明晰に語りうる。他方、語り得ないことについては、沈黙しなければならない」ということであった。「沈黙」の意味を明らかにするには、語り得ることと語り得ないこととの関係を明らかにしなければならない。その際、次の2つのパラグラフが参考になる。

「§4.114 哲学は、思考可能なこと（das Denkbare）を境界付け（abgrenzen）、それによって、思考不可能なこと（das Undenkbare）を境界付けなければならない。哲学は思考可能なことによって内側から（von innen）思考不可能なことを限界付け（begrenzen）なければならない。」

「§4.115 哲学は、語り得ること（das Sagbare）を明晰（klar）に描写する（darstellen）ことによって、語り得ないこと（das Unsagbare）を指し示す（bedeuten）だろう。」

ここでの「内側から」という語に注目すべきである。「内側から」とは、「語り得ることの側から」という意味である。つまり、両者には、「語り得ることの側から、語り得ないことを限界付ける」という関係がある。

この「限界付け」を「ここから先は語り得ない」（言わば「立ち入り禁止」）というネガティブな意味で解釈することもできる。しかし、それは十分ではない。なぜなら、本節第3項「語ると示す」と第4項「世界の存在」と第5項「私に示される」で述べたように、「語り得ないこと」が私に対して示されるという知のあり方が『論考』言語論の不可欠の要素だからである。したがって、§4.115の「哲学は、語り得ないことを指し示す」という言葉は、「哲学は、語り得ないこと（論理形式、世界の存在・私の存在・生の存在）を私に示す（知らしめる）」というポジティブな意味で解釈すべきである。

本節第7項「『論考』の哲学論」で述べたように、§6.54によれば、『論考』というはしごを登り切っ

たとき、私は世界を正しく見る。しかし、そのとき見えている（すなわち、示されている）ものを語ることはできない。だから、私は沈黙する。どんな命題によってもそこで示されているものを語り得ないことが既に私には分かっているからである。語ることはできない。しかし、語る必要もない。なぜなら、『論考』というはしごを登り切った私の眼には、全体としての世界が、全体としての私が、全体としての生が、すなわち、神秘が見えているからである。

しかし、本節第7項「『論考』の哲学論」で述べたように、『論考』の中でウイトゲンシュタインが使った「神秘」という語も（『論考』の言語論によれば）無意味（unsinnig）である。だから、『論考』というはしごを登り切ったとき私の眼に何が見えるかを語ることはできないのみならず、厳密に言えば、それは『論考』に書かれてもいない。つまり、『論考』によって示されるはずの「語り得ないこと」は一切『論考』に書かれていないのである。これは奇異なことではない。なぜなら、本節第7項「『論考』の哲学論」で述べたように、レシピを読んだだけでは味がしないのは当然だからである。

実際、『論考』の原稿が完成したあと、ウイトゲンシュタインは雑誌『ブレンナー』の編集者フィッカーに宛てた手紙の中で『論考』について次のように書いている。

「私の仕事は二つの部分からできています。すなわち、ここ〔『論考』〕に提示されていることと、私が書かなかったことのすべて、という二つの部分です。そして、まさしくこの二番目の部分〔書かなかったこと〕が重要な部分なのです。というのは、倫理的なものは、私の本によって、言わば内側から限界付けられているからです。そして、厳密には、このような仕方だけで限界付けることができる私は確信しています。要するに、こんにち多くの人が口から出まかせを言っていること〔倫理的なこと〕すべてに関して沈黙することによって、それらを私の本の中にしっかりと固定したのです⁴¹⁾。」

この手紙に言う「『論考』に書かなかったこと」が、まさに「語り得ないが示され得る神秘」すなわち、「『論考』というはしごを登り切った者に見える神秘」のことである。

だから、『論考』を読む私自身が何をするか次第で、『論考』というはしごを登れるかどうかが決まる。『論考』というはしごは、ただ読みさえすれば登れるはしごではない。『論考』はレシピにすぎないのであって、読者自身が何をやるかによって、『論考』の成否は左右される。それゆえ、哲学は学説でなく活動であり（§4.112）、『論考』は教科書ではない（「序文」第①段落）とウイトゲンシュタインは言うのである。

したがって、『論考』の言う「沈黙」（§7）は、このはしごを登り切ったあとに初めて可能になるような沈黙である。『論考』を書いた当時のウイトゲンシュタインにとって、「神秘」を直接語ろうとすることは、きわめて不誠実な態度に思われた。「神秘を示す」という困難な課題を果たすには、「語り得る

⁴¹⁾ 1919年の10月か11月に出した手紙。Nedo (2012) p. 169.

ことを明晰に語ることによって」という手段しかないとは彼は考えたのである。つまり、「『論考』の言語論という通路を通してのみ神秘に至ることができる」というのが当時の彼の信念だった⁴²⁾。そして、その通路の果てにあるのが「沈黙」である。だからこそ、§7は『論考』全体の結論として末尾に置かれたのである。そして、§7に、それを説明する命題が一つもぶらさがっていない理由も今や明らかである。『論考』全体が§7を説明する諸命題の役割を果たすことが期待されているからである。神秘が示されるためには『論考』全体が必要だということである。

要するに、『論考』という書物の目的は、「(言語の論理を正しく理解することによって哲学的諸問題を完全に解決するとともに、そして、それ以上に、) 言語のうちを示されている神秘に気づかせる」ということである。ただし、この目的が達成できるかどうか（言い直せば、『論考』というはしごを登れるかどうか）は読者次第である。このような仕組みで『論考』は作られている⁴³⁾。

文献表

- アンスコム, G. E. M. & P. T. ギーチ (1992) 『哲学の三人——アリストテレス・トマス・フレーゲ』野本和幸・藤澤郁夫訳, 勁草書房。
- Conant, James (2000) “Elucidation and Nonsense in Frege and Early Wittgenstein,” in Alice Crary & Rupert Read, *The New Wittgenstein*, Routledge, pp. 174-217.
- Diamond, Cora (2000) “Ethics, Imagination and the Method of Wittgenstein’s *Tractatus*,” in Alice Crary & Rupert Read, *The New Wittgenstein*, Routledge, pp. 149-173.
- Frege, Gottlob (1892) “Über Begriff und Gegenstand,” *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, 16, 1892, S. 192-205. (邦訳: 野本和幸訳「概念と対象について」野本和幸・黒田巨編『フレーゲ著作集4 哲学論集』勁草書房, 1999年, pp.49-70.)
- Frege, Gottlob (1918-1919) “Der Gedanke — eine logische Untersuchung,” *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, 2, 1918-1919, S. 58-77. (邦訳: 野本和幸訳「思想——論理探求 [1]」野本和幸・黒田巨編『フレーゲ著作集4 哲学論集』勁草書房, 1999年, pp. 203-235.)
- Frege, Gottlob (1893) *Grundgesetze der Arithmetik*, Bd. I, Jena, Verlag von Hermann Pohle. (邦訳: 野本和幸編, 野本和幸・横田榮一・金子洋之訳『フレーゲ著作集3 算術の基本法則』勁草書房, 2000年.)
- フレーゲ (2002) 『フレーゲ著作集6 書簡集』野本和幸編, 勁草書房。
- 飯田隆 (1997) 『ウィトゲンシュタイン——言語の限界』講談社。
- 伊佐敷隆弘 (1993) 「「経験」と「文法」——ウィトゲンシュタインの方法について」日本哲学会『哲学』第43号, pp. 201-211.

42) 本論文の基本方針である「『論考』全体をできるだけ整合的に読む」とは、「『論考』は言語や論理に関する書だ」「『論考』は価値に関する書だ」「『論考』は言語論と価値論という別々のものが併記された書だ」といういずれの読み方もせず、「『論考』の言語論と価値論の間には密接なつながりがある」というふうを読むということである。

43) 後期ウィトゲンシュタインは『論考』の言語論を批判し、「言語ゲーム」という新しい捉え方をするが、彼のおこなう「言語ゲームの記述」は、その記述に接する我々の反応を待って初めて機能する方法である。それゆえ、「語る／示す」の区別は（用語としては使われないが）後期でも維持されている。この点に関しては伊佐敷（1993）を参照せよ。

ただし、『論考』において、言語の外の「世界」が言語論（とりわけ像理論）の不可欠の要素であったのに対し、後期では、言語に内在する観点が徹底されるという違いがある。この点に関しては黒田（1975）を参照せよ。

ところで、コナント（Conant (2000) p. 196）は「『論考』が明らかにしようとしているのは、（後にウィトゲンシュタインが言ったように）『言語を以てしては言語の外へ出ることはできない』ということである」と言って、後期だけでなく『論考』も既に言語内在的観点を採っていたと主張する。しかし、本論文で明らかにしたように、『論考』全体をテキストに即して統一的に解釈すれば、コナントのような解釈は成り立たない。

- 黒田亘 (1975) 「意味の生成 —— ヴィトゲンシュタイン研究Ⅱ —— 」 黒田亘『経験と言語』東京大学出版会。
- McGuinness, Brian (1988) *Wittgenstein, A Life: Young Ludwig, 1889-1921*, Gerald Duckworth & Co. Ltd.. (邦訳: プライアン・マクギネス『ヴィトゲンシュタイン評伝 —— 若き日のルートヴィヒ 1889-1921』藤本隆志ほか訳, 法政大学出版局, 1994年.)
- Monk, Ray (1990) *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*, Jonathan Cape Ltd.. (邦訳: レイ・モンク『ヴィトゲンシュタイン』岡田雅勝訳, 全2巻, みすず書房, 1994年.)
- Nedo, Michael (2012) *Ludwig Wittgenstein: Ein biographisches Album*, C. H. Beck.
- 野家啓一 (2011) 「ヴィトゲンシュタインと自殺」『ヴィトゲンシュタイン』河出書房新社, pp. 35-37.
- Russell, Bertrand (1903) *The Principles of Mathematics*, Cambridge University Press.
- Russell, Bertrand (1922) "Introduction," in Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Kegan Paul, pp. 7-23. (邦訳: 「バートランド・ラッセルによる解説」ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』野矢茂樹訳, 岩波文庫, 2003年, pp. 151-180.)
- 鈴木祐丞 (2021) 「ヴィトゲンシュタインの「宗教的観点」 —— 『論考』とトルストイ, 『探究』とキルケゴール』『現代思想 —— 総特集 ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』100年』第49巻16号, pp. 150-164.
- ワイナー, D. A. (2003) 『天才と才人 —— ヴィトゲンシュタインへのショーペンハウアーの影響』寺中平治・米澤克夫訳, 三和書籍.
- Whitehead, Alfred North & Bertrand Russell (1910) *Principia Mathematica*, vol. 1, Cambridge University Press. (邦訳: A・N・ホワイトヘッド, B・ラッセル『プリンキピア・マテマティカ序論』岡本賢吾, 戸田山和久, 加地大介訳, 哲学書房, 1988年. ただし, "Introduction"の訳.)
- Wittgenstein, Ludwig (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*, Kegan Paul. (邦訳: ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』野矢茂樹訳, 岩波文庫, 2003年.)
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*, Blackwell. (邦訳: ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』鬼界彰夫訳, 講談社, 2020年.)
- Wittgenstein, Ludwig (1961) *Notebooks 1914-1916*, Basil Blackwell. (邦訳: ヴィトゲンシュタイン「草稿一九一四——一九一六」奥雅博訳, ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『ヴィトゲンシュタイン全集1 論理哲学論考他』大修館書店, 1975年, pp. 121-357.)
- Wittgenstein, Ludwig (1974) *Letters to Russell Keynes and Moore*, Cornell University Press.
- Wittgenstein, Ludwig (1977) *Culture and Value*, The University of Chicago Press. (邦訳: ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『反哲学的断章 —— 文化と価値』丘沢静也訳, 青土社, 1999年.)
- ヴィトゲンシュタイン, ルートヴィヒ (2005) 『ヴィトゲンシュタイン哲学宗教日記1930-1932/1936-1937』イルゼ・ゾマヴィラ編, 鬼界彰夫訳, 春秋社.
- ヴィトゲンシュタイン, ルートヴィヒ (2016) 『ヴィトゲンシュタイン『秘密の日記』 —— 第一次世界大戦と『論理哲学論考』』丸山空大訳, 春秋社.
- 吉田寛 (2009) 『ヴィトゲンシュタインの「はしご」 —— 『論考』における「像の理論」と「生の問題』』ナカニシヤ出版.